

一

次の問いに答えなさい。

問1 線を漢字に直しなさい。ただし、送りがなが必要なものは、それもふくめて書きなさい。

- ① ユウエキな情報を得る。
- ② オンジンに感謝する。
- ③ ココロヨイ音色がきこえてきた。

問2 線の読みを、ひらがなで答えなさい。

- ① 行ないを改める。
- ② 木綿の服を買った。
- ③ 生物係として金魚を飼育する。

問3 次の各文字に共通の部首をつけると熟語になります。その部首名をひらがなで答えなさい。

《例》 月音↓明暗 答…ひへん

楽早

問4 次の①～④の()内にア～オの言葉を入れて、文を完成させたとき、残るものはどれですか。一つ選んで記号で答えなさい。

- ① おそらく明日は暑くなる()。
 - ② 僕があきらめることは決して()。
 - ③ まさか彼が遅れて来ることはある()。
 - ④ たとえ苦しくなつ()、ゴールまで走り続ける。
- ア まい イ ない ウ ても
エ べき オ だろう

問5 次の□の中にあてはまる数字の合計を、漢数字で答えなさい。

- 三寒□ 温(冬に寒暖が、代わるがわる訪れること)
九死□ 生(ほとんど死ぬところだったのを助かること)

問6 次の説明にあてはまる人物を、後から選び、記号で答えなさい。

明治時代の女流作家で、幼い恋を描いた「たけくらべ」などが代表作とされる。現在の五千円札には、彼女の肖像が採用されている。

- ア 幸田文 イ 林芙美子
ウ 樋口一葉 エ 与謝野晶子

二 次の記事を読んで、後の問いに答えなさい。

「一」

そういえば、以前、ハクチョウへの餌やりの問題を、拙著『ネッシーに学ぶ生態系』(岩波書店)に書いたことがありました。

日本の多くの湖や川が水質汚濁問題を抱え、その問題の解決のため、下水処理場をつくるなど、巨額の税金を投入して水質浄化対策を進めています。その湖や川で、^①「ハクチョウの会」の人々が、組織的に餌を与えてハクチョウを集めていることを批判しました。なぜなら彼らが与える餌は穀物やパンなどです。これらは有機物であり、それは水を汚す物質そのものだからです。すなわち、ハクチョウに餌を与えることは、湖や川を汚す行為そのものなのです。普段は水質浄化の必要性を唱えている人々が、矛盾することをしているのです。そもそもハクチョウは野生生物で、自分たちで十分に餌が採れるのに、わざわざ餌を与えることに意義は見いだせません。それどころか、餌やりが野鳥にとっても害になることが指摘されるようになってきました。例えば、餌を与えられたハクチョウやカモが太って飛べなくなったり、心筋梗塞を起こして命を落とす事例が見られるようになったからです。

私がそのようなことを考えていたとき、「ハクチョウの会」の人が与える餌を目当てに飛来したハクチョウを見ました。すると、そのハクチョウに対して、私自身が敵意を抱きました。^②それに気づいたとき、私はたじろぎました。ハクチョウには罪がなく、問題は餌を与える人間であるのに、ハクチョウに対してまで敵意を抱いてし

まうとは。

そこで私が考えたことは、人間は本来(本能的に)、「敵」と「味方」をつくる生物なのではないか、ということでした。恐らく、これは人間だけではなく、多くの生物が持っているものではないでしょうか。すると、子どもが同じように生物たちを見るのも当然の結果といえそうですね。しかし、だからといって、それを放任していると、人間社会や生態系に災いが生じるようになるでしょう。

ではどうしたらよいのでしょうか。私は、子どもを外来種駆除のイベントに参加させるべきではないと思います。なぜなら、彼らの人生経験が浅いために、大人がイベントの開始時に簡単に行った外来種問題の説明に対して、何らの疑問も持たず、その話を鵜呑みにしてしまうからです。その結果、大人が意図したこと異なる理解をする可能性が高いからです。

子どもたちには、「外来種退治」ではなく、もつと自然の中でさまざまな植物種や動物種を観察させ、多くの異なる生物種が共存しているしくみや、生物群集が環境の変化に応じて変わる様子などを説明し、生態系の理解を少しでも深めさせることが必要だと思います。それが将来の生態系保全に大きく貢献することになるでしょう。

「二」

もう一つ「外来種駆除大作戦」について危惧していることがあります。それは、^⑤その行為が生態系のバランスを大きく変えてしま

可能性があるのではないかということです。

例えば、その地で広く分布しているセイウタンポポのほとんどを駆除すると、その空いた場所に全く異なる植物が入ってきて、結局二ホンタンポポは分布を拡大することができないかもしれないと思えるからです。それどころか、セイウタンポポの後を継いで侵入した植物が、新たな問題生物となる可能性も否定できないように思えます。

さらに考えるべきことと思うのは、セイウタンポポが日本に侵入してからすでに一〇〇年以上たっているのに、その長い時間の間に、このタンポポが他の在来生物種と強い関わりを持つようになっっているかもしれないということです。具体的な例を挙げることはできませんが、例えばセイウタンポポを主要な餌とするようになった動物や、土壌の中にセイウタンポポに依存した微生物群集がつくられているかもしれません。そして、それらの生物にとって、二ホンタンポポがセイウタンポポの代役にはならないとしたらどうでしょう。すると、ある地域からセイウタンポポを駆除する行為は、現在そこにつくられている生態系を強く攪乱することになるでしょう。

生態系はあまたの生物によって構成されており、それぞれの生物が他の生物と相互に関わりを持ちながら暮らしています。その相互関係のはたらきで、それぞれの生物種の個体数は、ある程度変動しながら全体としてバランスがとれているのです。例えば、ある場所

で、一種のネズミが豊富にいる餌生物を食べて急速に増えると、餌生物が減り始めます。すると、その餌不足は、ネズミの個体数の増加を抑えます。また、ネズミの増加はキツネなどの捕食者を呼ぶことにもなります。その結果、捕食者に食べられて死亡するネズミが増えます。これも、ネズミの個体数が増えるのを抑える要因となります。餌不足と捕食者によってネズミが減ると、次には餌生物の数が回復し始めます。また、餌となるネズミが減ったためキツネは新たな餌を求めて他の場所に移動します。その結果、ネズミは再び個体数を増やします。

ただし、その生き物たちのバランスは、環境の変化に伴って変わります。^①例えば、乾燥化や酸性雨などによって森林が後退し始めると、木々の間で隠れるように暮らしていたネズミが、捕食者に見つかりやすくなります。それによって個体数を減らしますが、森林の後退がある程度のところでは止まると、その森林が捕食者の目から隠すことのできるネズミの数だけ、ネズミが生き残れるようになります。この数は、以前の森に暮らしていたネズミの数よりも少ないのですが、それでも何とか個体群を維持できるようになるでしょう。すると、森林の衰退が、ネズミと捕食者を新たなバランスの下で共存させるようになったといえます。この場合、森林の存在がネズミと捕食者にとっての重要な環境因子となったのです。^②ところで、この森林の衰退を見て、生態系が破壊されたと表現する人がいるでしょう。しかし、私は、これは「生態系が変化した」

というべきと考えます。A、そこにはあいかわらずたくさんの生物が暮らしているのです。生物がいれば、そこには生物間の相互関係がつくられており、それを介して物質が循環しているからです。

生態系は環境の変化に柔軟に対応して姿を変えます。人間は他の生物と同様に、まぎれもない生態系の一員です。〔3〕したがって、人間による活発な活動は、今の生態系につくられているバランスを大きく変化させることになります。そうすると、変化した生態系の中に人間自身の居場所がなくなるかもしれません。そうならないようにするために、私たちは、生態系のバランスを常に意識することが必要でしょう。そして、多くの人が、生物種や生態系を客観的に見て、生態系が維持されているしくみを理解することが求められているのです。〔4〕

（『生態系は誰のため？』花里孝幸）

*拙著：自分の書いた書物のへりくだった言い方。

*矛盾：二つのものが食いちがつて、つじつまが合わないこと。

*危惧：あやぶみおそれること。気がかり。

*攪乱：かき乱すこと。

*因子：ものを成り立たせる要素。

問1 — 線①『ハクチヨウの会』の人々が、組織的に餌を与えてハクチヨウを集めていることを批判しました」とあります

が、なぜですか。その理由を本文中の言葉を用いて答えなさい。

問2 — 線②「それ」とはどういうことですか、文中の言葉を用いて答えなさい。

問3 — 線③「たじろ（く）」、⑥「あまたの」の意味として、もつともふさわしいものを、それぞれ次から選びなさい。

③「たじろぐ」

ア とまどう

イ うんざりする

ウ くやむ

エ 怒る

⑥「あまたの」

ア わずかな

イ たくさんの

ウ ひとつの

エ めずらしい

問4 — 線④「多くの異なる生物種が共存しているしくみ」を言いかえている言葉を、本文中から八字で書きぬきなさい。

問5 — 線⑤「その行為」はどのようなことを引き起こす可能性があると考えられますか。もつともふさわしいものを、次から選びなさい。

ア 駆除のために大勢の人間が生態系に入ることによってそのバランスが崩れる可能性

イ 古くから日本にいる微生物を駆除してしまうと、そこでの生態系が崩れる可能性

ウ 分布の拡大を目指すニホンタンポポをまちがつて駆除してしまう可能性

エ 今ある外来種を駆除したあとに入った植物が、新たな問題になる可能性

問6 — 線⑦「増加」と反対の意味の言葉を、漢字二字で答えなさい。

問7 本文には次の一文がぬけています。あてはまる場所として正しいものを、〔1〕～〔4〕から選び、数字で答えなさい。

またそれと同時に、人間の存在は、生態系に影響を及ぼす環境因子でもあります。

問8

A

 にあてはまる語としてもつともふさわしいものを、
選びなさい。

ア もし
イ あるいは
ウ なぜなら
エ だから

問9 【Ⅰ】【Ⅱ】に入る小見出しの組み合わせとしてもっともふさわしいものを、次から選びなさい。

ア 【I】野生のハクチヨウによる水質汚濁

【Ⅱ】限りある自然の有効的な利用方法

イ【I】動物に対する人間の自己中心的考え

【Ⅱ】生態系を維持することの難しさ

ウ【I】餌目当てのハクチヨウに敵意を抱く

【II】生態系のバランスを意識すること

工
【I】野生動物と飼育動物のちがい

【Ⅱ】環境保護のための自然と人間の共存

問10 筆者の意見としてもっともふさわしいものを、次から選びなさい。

ア すべての外来種は生態系のバランスを壊してしまうため駆除すべきである

イ 今後の生態系を守るためにも子どもたちは外来種駆除に参加する必要はない

ウ 森林衰退は生態系の変化ではなく人間の手による破壊であるため対策の必要がある

エ 人間は敵と味方をつくる生物であることが近年の研究によつて明らかになつてきた

ア すべての外来種は生態系のバランスを壊してしまふため駆除すべきである

イ 今後の生態系を守るためにも子どもたちは外来種駆除に参加する必要がある

ウ 森林衰退は生態系の変化ではなく人間の手による破壊であるため対策の必要がある

エ 人間は敵と味方をつくる生物であることが近年の研究によつて明らかになつてきた

工 人間は敵と味方をつくる生物であることが近年の研究によつて明らかになつてきた

[illegible]

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

青鸞せいらんのバドミントン部では基礎きそ打ちの相手を固定しないようになつてゐる。翼つばさと千波ちはや矢も、日によつて違う部員と基礎打ちをしてゐる。

土曜曰、久々に二人は互たがいを相手にした。そして翼つばさは驚おどろかされ

いつの間に、こんなに上手くなったのだろう。

姉との特別練習で、こけこつこーなどと言いつづけてゐるうちに、スマッシュ以外のショットもこんなにちゃんと打てるようになったのだ。

もしかしたら千波矢は本当にバドミントンに向いているのかもしれない。スマッシュは天^{てん}与^よのものとして認めていた。だがそれだけでなく、この競技そのものへの適性があるのかもしれない。だとしたら……。

翼は珍しく千波矢のスマツシュを返せなかつた。レシーブをネットにかけた。のそのそと歩いていつてシャトルにラケットを伸ばす。が、そこで止まつてしまう。

だとしたら……今のダブルスのスタイルは千波矢のためにならない。伸びていく彼の才能を犠牲ぎせいにしているのかもしれない。スマッシュしか打てない千波矢、スマッシュを打てない翼——二人の欠点を補い合うために今のスタイルを選択した。だがもし千波矢がこのまま上手くなっていき、あらゆるプレーができるようになったら、その時二人のダブルスはどのようなのだろう。

「翼に勝ちたいと思わない？」

あの問いを聞いた時、千波矢の答えを聞いてもいないのに心に何か刺さったような気がしたのは、いつか千波矢に追い抜かれるという可能性を、不吉なものと捉えているからだろうか。

——俺は無意識のうちにそんな未来を避けたがつている？

そんなはずはない、と翼は否定を込めてまばたきをする。シャツ
ルを拾い上げる。

そんなはずはない、けど……。

「なあ千波矢」

「どうしたの」

千波矢は不思議そうな顔でネットに近づいてくる。

「インターハイ予選……お前、シン」

「うん？」

「いや、なんでもない」と翼は言つた。

シングルスでも出たかったかと訊こうとして、やめたのだ。ダブルスにしかエントリーしなかったことを、後悔しているか、と。

訊こうとして、やめたのは、その答えが怖かったからではない。

訊くことで自分の中で何かが固まってしまう気がしたからだ。

今となつては当然手遅れだが、千波矢はインターハイ予選にシングルスでエントリーすることもできたはずだった。翼はダブルスに専念するためシングルスでの出場をしなかったが、千波矢までそうしなければならぬ道理は本来なかったのだ。出会ったばかりの

頃、「ダブルスに絞りたい」と電車の中で話したのは、あくまで翼の意見でしかない。だが、その意見というのが千波矢に対してほぼ命令になってしまうのを、あの時点で翼は知っていた。知っていたのだ。千波矢からシングルの公式戦経験を一つ奪う事になるという、重大さもよく考えないままに。

いつだろう、と翼は思う。

自分の中で固まってしまうような何かの正体はもう掴めてしまっている。避けたいと思えばこそ何かの輪郭ははつきりとする。

ペアの解消。

それはいつのことになるだろう。

いずれ必ずその時は来る気がする。自分と組むことが千波矢の可能性を奪い続けることになるなら、

A

であれば、早くてもいい。早い方がいい。

今が最後でもいい。

翼は眉間に薄い皺を作る。色々な考えが、ごちゃごちゃになっていくのになぜか球体のようなめらかさで頭の中の坂を転がり落ちていく。

サーブスの構えを取る。向こうのコートに目をやると、千波矢はまだ不思議そうな顔をしている。

翼のラケットから、普段なら決してありえない、投げやりなサーブスが放たれる。

練習後の部室内で、珍しく千波矢の方から翼に声をかけてきた。

「大丈夫？」

千波矢は真面目な顔をしていた。

「なんのこと」

「様子がヘン」

「俺の？ どこが」

「テンション低い」

千波矢は臆病そうに言葉を運ぶ。「苛々してる」

最悪だな、と翼は思う。まさか千波矢に心配されるとは思ってもみなかった。情けない話だ。

「大丈夫だよ」翼は優しく言った。「苛々してない。テンションも低くない。別にお前が心配するようなことは何もない」

「そう」と千波矢は目を逸らし、シューズの紐を解きにかかる。

その横顔を見た瞬間に翼は気づいた。

唐突に理解した。

ああ、これか、と思い知った。

千波矢は同い年だ。千波矢は同じスポーツをやっている。千波矢は同じ部活のメンバーだ。千波矢はダブルスのパートナーだ。なのに、なぜ、心配されてはいけないと思ったのだろうか。

答えは簡単だった。

翼のなかで、千波矢が対等の存在じゃないからだ。

翼は後ろ髪に指を立てる。

力を合わせて強くなるのだと、そう思っていた。そういう形の意

気込みが自分の中にあるのだと思い込んでいた。千波矢を右腕の代わりと考えたことは本当に一度もない。だが実際、パートナーとして対等とも思っていないかったのだ。実力云々という以前に、同じコートに立つ存在として。

これについては反省すべきだった。己を見つめ直すべきだと思った。だがそれは一人になってからにしたかった。

もはや千波矢に何と声をかけていいか分からなくなってしまった翼は、帰り支度を済ませると、無言で部室をあとにした。

.....【中略】.....

千波矢はようやく息が整ったらしく、口を閉じ、ポケットに手を入れた。そして「[Nil desperandum]」のキーホルダーを取り出して翼に渡した。

「体育棟出てすぐの所に落ちてた」

「マジか」

受け取ったキーホルダーは金具の部分が緩くなっている。バッグにつけ直すのはやめて、ポケットに仕舞った。「サンキュー」

しかしわざわざこれを届けるために走ってきたのか。それともさっきのことを言いたかったのだろうか。どちらにしても明日でいいのに、と翼には思える。

「わざわざ、悪かったな」

そういつて駅の方へ爪先を向けた。「行こうぜ」

④ だが千波矢は、その場から一步も動こうとしなかった。

「話したいこと、あるから来た」

「今話したのは別の件で？」

千波矢は頷く。

「最近、やっと分かったから」

「何を」

「この世界で、誰も、俺の本当の気持ちを代わりに言ってくれたりしないってこと。俺が、俺の声で、俺の目の前にいる人に言わなきゃいけないってこと」

「はあ……」

「俺は翼くんと戦って勝ちたいとは思わない。でも俺は翼くんと戦って勝ちたい」

「はあ？」

「翼くんと一緒に戦って、ダブルスで勝っていきたい、ということ、です」

翼は黙っていた。

「コートと練習してるのはシングルスで勝ちたいからじゃない。全部、ダブルスのためだと思ってやってる」

千波矢の視線はコンビ二のごみ箱に向けられ、固定されている。彼が頭の中で、必死で言葉を探しながら話しているのが翼に伝わっ

てきた。

「俺は一人のプレーヤーになる。その上で翼くんと対等のパートナーになる。肩を並べる」
対等。

この言葉が今、千波矢の口から出たのは、必然的符号なのかもしれないかった。

「二人で勝つために俺は強くなりたい。いつまでも翼くんの背中、見てるだけじゃなくて」

「そうか。そんなことを考えてたのか」

「生意気、ですか」

「いや」翼は呟く。そして首を振る。「そんなことない。全然ない」からっぽだと思っていた。

そう決めつけていた。

千波矢にはスマッシュの才能があつて、それ以外、こんな短期間じゃあどうせ碌に打てるようにならないと、プレーヤーとしての彼に勝手に B を引いていた。

誘つたのは自分なのに、こんなふうには、ひたむきな姿勢で応えてくれることを翼は信じていなかった。「どうしたらいい?」。そう言っていた、出会った時の印象で千波矢の全てを量り切れた気になつていたのだ。所詮、自分と同じだけの情熱は持つていないと。人は成長するものだということを、同年代の誰より知っているはず

なのに。

「それが、お前の気分なんだな」

千波矢は頷く。

⑥「今の、俺の、気分」

「悪かった」

翼は真っ直ぐに千波矢の目を見た。「やっぱり俺、お前のことナメてたみたいだ」

そのことに今の段階で気づけて良かった。

「二人で強くなろう」

千波矢は深く頷く。

『スマッシュエース』 朽葉屋周太郎

* 「Ni desperandum」のキーホルダー…翼の好きなバンドのグッズ。

問1 — 線①「何か」とは、具体的にはどういう考えのことですか、答えなさい。

問2 — A にあてはまる語句として、もつともふさわしいものを、次から選びなさい。

ア その時は来るべきとすら思える

イ 俺はバトミントンなんてやめてやる

ウ その時は来てはいけないと思う

エ 俺はペアを解消したくない

問3 — 線②「普段なら決してありえない、投げやりなサービスが放たれる」とありますが、この時の翼の心情として、もっともふさわしいものを、次から選びなさい。

ア 自分が千波矢の足手まといになつていることに、いらだつている

イ 千波矢のスマッシュを返せなかったことに、ショックをうけている

ウ スマッシュが打てない自分と比べ、千波矢のことをねたんでいる

エ 千波矢の上達ぶりを目にし、今後のペアのあり方について思いなやんでいる

問4 — 線③「これ」とはどのようなことを指していますか、説明しなさい。

問5 — 線④「話したいこと、あるから来た」とありますが、これ以降の千波矢のセリフを音読するには、どのような調子をもっともふさわしいですか。次から選びなさい。

ア 悲しみのあまり、相手を強く責めるような調子

イ 勇気をふりしぼり、必死にうったえるような調子

ウ ひどくがまんして、怒りをおし殺すような調子

エ 自信をもつて、相手を熱心に説得するような調子

問6 — B にあてはまる語として、もっともふさわしいものを次から選びなさい。

ア 手 イ 目 ウ 線 エ 糸

問7 — 線⑤「ひたむきな」の意味を、次から選びなさい。

ア 物事を明るく考える イ 物事に熱中している

ウ 何事も悪く受けとめる エ 何事にもひかえめである

問8 — 線⑥「今の、俺の、気分」とは、どのような気分ですか、三十字以内で答えなさい。

問9 この先、翼と千波矢はどのようなペアになっていくと考えられますか。もっともふさわしいものを、次から選びなさい。

ア 肩を並べてさらなる高みを目指すペア

イ 弱点を補い合うことで強くなるペア

ウ 千波矢の成長を第一に考え戦っていくペア

エ 翼のプレーを中心に勝ち進んでいくペア

問10 本文の内容としてふさわしいものを、次から選びなさい。

ア 翼は千波矢に追いぬかれる可能性をおそれて、基礎打ちの練習を違う部員で行っていた

イ 千波矢はインターハイ予選にシングルスで出場したかったが、翼に遠慮して取りやめた

ウ 千波矢の方がバドミントンはうまいが、実力者の翼に対して常に気をつけている

エ 翼は千波矢の心とはじめて向き合うことで、決意を新たにすることができた

解答用紙

③

6 問

問
2

問
5

問
10

1

三

問
4

問
7

30

10

ふりがな